

P3-22-6 70歳以上の高齢者に対する腹腔鏡下付属器切除術と開腹付属器手術の比較検討

産業医大¹, 産業医大産業保健学部²植田多恵子¹, 卜部理恵¹, 栗田智子¹, 鏡 誠治¹, 川越俊典¹, 松浦祐介², 蜂須賀徹¹

【目的】高齢者良性卵巣腫瘍患者に対しての腹腔鏡下手術を開腹術を対照として検討する。【方法】当施設にて70歳以上では2008年10月から2014年3月までの間に腹腔鏡下付属器切除術を13例に施行した。高齢者への腹腔鏡下手術導入以前に直近で良性卵巣腫瘍に対して開腹付属器切除術を施行した13例を対照として後方視的に検討した。【成績】腹腔鏡下手術群と開腹群で年齢, 経妊経産回数, 術前自覚症状, BMI, 基礎疾患, 腹部手術既往, 摘出最大腫瘍径に有意差はなかったが, 診断から手術までは開腹(0-4か月 平均1.2か月)に比べて腹腔鏡(1-99か月 平均21.5か月)で有意に長かった。手術時間は腹腔鏡で46-156(平均114分), 開腹で45-145(平均81分)と腹腔鏡で有意に($p<0.01$)長かったが, 出血量は腹腔鏡0-140(平均16ml)に対して開腹0-130(平均44ml)で有意差は無かった。術中皮膜破綻は腹腔鏡で2例, 開腹で0で有意差はなかった。術後抗凝固療法施行は腹腔鏡4例に対して開腹6例で有意差は無かった。術後初回歩行は腹腔鏡で全例術翌日に施行したが開腹では術翌日7例, 術後2日目で6例で有意に($p<0.01$)開腹で遅れた。術後入院日数も腹腔鏡の3-7日(中央値4日)に対して開腹が9-15日(中央値11日)であり, 有意に($p<0.01$)開腹で長かった。【結論】高齢者の腹腔鏡下付属器切除術は開腹術よりも手術時間は延長したが出血量増加や合併症頻度の上昇はなかった。診断から手術日までの日数が腹腔鏡で長かった要因としては, 開腹術を希望せず様子観察していた患者が腹腔鏡であれば手術を希望したことが挙げられ, 初回歩行開始や入院日数の短縮される腹腔鏡下手術は高齢者に対してメリットがあると考えられる。

P3-22-7 卵巣腫瘍合併妊娠における単孔式腹腔鏡下手術の有用性

神戸医療センター

吉田 愛, 杉本 誠, 山下詩乃, 辻野太郎, 武内享介

【緒言】妊娠初期に診断された卵巣腫瘍に対して腹腔鏡下手術を施行する場合, 増大した妊娠子宮による手術操作の制限から, 手術時期ならびにトロッカーのサイズや配置に苦慮する。さらに, 子宮の増大による皮膚の伸展により創部の癒着や色素沈着が生じることが多い。我々は妊娠初期に診断された嚢胞性卵巣腫瘍に対して画像診断にて悪性所見がないことを確認後, 単孔式腹腔鏡下手術を施行し, 手術手技, 施行週数, 整容性に関して検討した。【症例】症例1(妊娠15週): 右側6cmの嚢腫に対して卵巣腫瘍核出術を施行し, 子宮内膜症による癒着を認めたため細径鉗子を併用した。症例2(妊娠16週): 右側6.5cm, 左側3cmの腫瘍に対して両側卵巣腫瘍核出術を施行した。症例3(妊娠16週): 右側4.5cmの腫瘍に対して卵巣腫瘍核出術を施行した。症例4(妊娠16週): 左側5cmの腫瘍に対して卵巣腫瘍核出術を施行した。症例5(妊娠16週): 右側11cmの腫瘍に対して卵巣腫瘍核出術を施行した。【結論】単孔式腹腔鏡下手術では創部の大きさが2.5cm程度で, 妊娠子宮により卵巣が臍創部近くにまで移動するため, 充実部分が存在する成熟嚢胞性奇形腫などに対しても体外法での核出が容易であった。整容性に関しては臍部を切開するため, 妊娠週数の進行による色素沈着はあまり目立たず, 切開創が臍輪を超える場合は上方へ延長し, 術後から産後まで創部にテープを貼付するなどの工夫が有効であった。単孔式腹腔鏡下手術の施行時期に関しては, 妊娠子宮による卵巣腫瘍の拳上と操作の制限を相互勘案すると, 妊娠16~17週が至適であると考えられた。また癒着が存在する場合は, 細径鉗子の併用が有用であると考えられた。

P3-22-8 小児および若年女性の付属器腫瘍に対する臍部単孔式腹腔鏡下手術の有用性に関する検討

岐阜県立多治見病院

中村謙一, 林祥太郎, 井本早苗, 中村浩美, 竹田明宏

【目的】19歳以下の小児および若年女性の付属器腫瘍に対する臍部単孔式腹腔鏡下手術(LESS)の安全性と有効性を評価することを目的とした。【方法】小児および若年女性の付属器腫瘍に対し, 吊り上げ法による単孔式あるいは多孔式腹腔鏡下手術を施行した各28例を対象とし, 後方視的に, 両群間での患者背景, 手術手法, 手術成績について比較検討した。【成績】LESS群の平均年齢は17.5歳で, 3例は初経前であった。最も頻度の高い主訴は腹痛であった。最大腫瘍径は, LESS群で7.4cmであった。両群間で患者背景に統計学的有意差は認めなかった。LESS群での手術術式は, 片側嚢腫核出術20例, 片側付属器切除術5例, 両側嚢腫核出術2例および片側卵管切除術1例であった。緊急手術は, 茎捻転の7例および嚢腫の破裂の1例で行われた。茎捻転の緊急手術3例では高度な壊死のため, また, 粘液性腺腫の再発および巨大粘液性腺腫の各1例では, 正常部分の同定が困難なため, 卵巣温存が出来なかった。LESSを施行した22人の患者における24個の卵巣腫瘍において, 14個で臍部体外法による核出術が可能であったが, 10個では, 可動性が不良なため, 体内法による核出術が必要であった。体外法による核出術を施行した皮様嚢腫の1例では, 骨盤漏斗帯の断裂出血に対する止血のため, 体内縫合結紮が必要であった。摘出重量の平均は, 111gであった。LESS群における術後3日目のCRP値が有意に低い以外は, 両群間で手術成績および病理学的診断に統計学的有意差は認めなかった。【結論】小児および若年女性に対する臍部単孔式腹腔鏡下手術は, 多孔式手術と同等の安全性や有効性があり, 更に, 整容性において優れた手法であった。